

## 神田 日勝



【神田 日勝の写真】

神田日勝は、一九三七（昭和十二）年十二月八日に東京都練馬で生まれた。日中戦争のさなかであったことから、「日本勝利」という希望を託して日勝と名付けられた。家族は父母と二人の姉、兄、そして妹の七人である。

父は衣料品を販売していたが、戦況の悪化と共に経営は苦しくなり、やがてその日の食べ物にも困るようになった。一九四五（昭和二十）年八月、一家は戦火を逃れるために戦災者集団帰農計画に基づく\*拓北農兵隊に加わった。長旅を経てようやく鹿追に着いたのは、奇しくも終戦の前日、八月十四日であった。

敗戦の影響から、畑の貸付や農機具の給付などの約束は守られず、かろうじて支給された鋏一丁と鋸一枚で手つかずの原野を開墾することになったのである。

神田一家には五ヘクタールの開拓用地が与えられた。農業経験のない都会生活者が未開地をゼロから開拓するのは容易ではなかった。父は開墾だけではなく、現金収入のために郵便配達や他の農家の手伝いをして一家を支えていた。

苦しい生活の中でも、日勝は明るくおおらかに育った。開墾の仕事を手伝い、好きな絵を描いた。兄と一緒に仕掛けを作って野ウサギを捕獲し、冬にはスキー板を作って遊んだ。鹿追中学校に進学した日勝は美術部を創部した。兄も帯広の高校で美術部に入り、のちに芸術大学へ進学している。日勝は中学校を卒業後、進学せずに農家を継いだ。日勝は友人に、「自分は農業が好きで、それを継ぐのはむしろ当然のことだと考えていた」と話している。

やがて兄を通じて油彩画の魅力を知った日勝は、次第に創作への意欲を燃やすようになった。

その第一作ともいえるのが、十八歳の年に帯広平原社展で奨励賞となった『瘦馬』である。ベニヤ板に描かれたこの作品は、地方都市の展覧会とはいえ、自分の力量を問うという意味でまさに彼のデビュー作であった。翌年の平原社展には『馬』が出品され、平原社賞（最高賞）を受けた。

神田一家が初めて手に入れた農耕馬は、家畜商にだまされて買った老馬であった。この馬が『瘦馬』のモデルではな

いかと言われている。日勝の描く馬は農耕馬であり、仕事の仲間でもある。骨格のがっしりとした初期の『馬』は、体毛を\*ペインティングナイフで一本ずつ緻密に表現し、\*胴引きのために一部がすり切れている、まさに働く馬の勲章と呼ぶべき部分まで描写したのである。

日勝が農家を継いだ頃、世の中は高度経済成長期に入り、街中や農耕から馬の姿が急激に減少していた。しかし、積雪の多い北海道では冬期間の運搬に馬が不可欠であり、様々な作業に適していること、\*厩肥の生産等のメリットから、馬利用を継続する人も少なからずいた。日勝もその一人で、近隣の農家がトラクターを入手する中、馬を使って田畑を耕した。日勝にとつて馬は、日々共に暮らす家族であり、生きるために手放せない存在でもあった。

一九六二（昭和三十七）年、二十四歳の日勝は、農村青年団の集まりで知った高野ミサ子と結婚した。二人は互いによき理解者であり、ともに畑に出て、牛や馬の世話もした。

生活は決して楽ではなかった。日勝は、通常なら油彩画にはキャンバスを使うところを、ベニヤ板に描いた。これはペインティングナイフを押しつけた際のダイレクトな手応えを好んだためと言われるが、制作費を安く上げるという理由もあった。

一九五七年の冷害、六三年の台風による大被害、六六年の冷害、そしてこの頃から急速に進んだ農業合理化のために、離農する小規模農家が後を絶たなかった。

厳しい生活の中で創作活動を続けた日勝は、テレビや新聞の取材、全道展や独立展の成績などから少しずつ名前を知られるようになり、作品制作を依頼する人も増えてきた。しかし、絵をもって生計の足しにするには至らなかった。

日勝は、「絵を描きたいという気持ち」について問われた時に、しばらく考えて「排泄行為と同じである」と答えている。自然に湧き上がり、我慢ができなくなれば溢れてしまうものであり、生きることと同義のものと考えていた。

日勝は、「農民画家」と呼ばれることを嫌っていた。世間が日勝が開拓者であることや独学であることを強調しすぎることについて、「僕のことを僕自身よりも詳しく知っている人がいて、僕に解説してくれる」と一人歩きする「農民画家」の美談について、兄にこぼしたことがあった。また、日勝は、画家として評価が高まるにつれて、農業のために制作時間が制限されることへの焦りと、制作のために農業に専念しきれないこと、画家と農民どっちつかずの状態について悩みを抱えるようになった。

神田日勝といえば、未完の馬の絵を想像する人が多いか



【『馬』(絶筆・未完) 1970年】

歳の短い生涯であった。未完の作品が残された。日勝独特の一方から描き上げる描法で後脚の近くまで毛並みを丹念に描き、そこで中断された半身の黒い馬の絵である。横向きの穏やかな瞳のその馬には、やはり胴引きの跡があった。

もしれないが、牛や馬、労働者やアトリエなど身近なものをモチーフにしながら、しかしその画風は大きく変化している。自身の将来への不安を表すかのようにうつろな目つきの青年の絵は自画像と言われている。カラフルなポップ・アートのような作品もあれば、奔放に筆を走らせ、感情やエネルギーをぶつけたような作品もある。自身の表現を追求したい一方で、独立展への入賞のため、世間に受け入れられる絵をねらおうとする「焦り」もあったのかもしれない。

一九七〇(昭和四十五)年の春から体調不良が続き、八月に入り、新得町の病院に入院したが、病名不明のまま症状が悪化し、清水町の日赤診療所に移った。蓄積された疲労は容易に彼の体から抜けなかった。八月二十五日、神田日勝は帰らぬ人となった。死因は腎盂炎じんうえんによる敗血症だった。三十二

わずか十四年の画業であったが、彼の制作の根底には一貫して「いかに生きるべきか」の自問自答があった。様々な画風に挑戦したが、作品は常に牛馬や農民風の労働者、アトリエや絵の具など、自分自身が切実に「これなしでは生きられない」と思う必要不可欠な存在を選んで描いた。

「結局、どういう作品が生まれるかは、どういう生き方をするかにかかっている。どう生きるのか、の指針を描くことを通して模索もさくしたい。どう生きるかと、どう描くかの終わりのない思考のいたちごっこが私の生活の骨組なのだ」

日勝が亡くなる一ヶ月程前の言葉である。

- \* 拓北農兵隊：疎開と食糧生産を目的とした移住開拓隊
- \* ペインティングナイフ：油絵を制作するときに使う金属性のへら
- \* 胴引き：馬と農機具を連結するための馬具
- \* 厩肥：家畜の排泄物と敷きわらなどを混ぜて作る肥料

- ◎ 日勝にとって、「描くこと」はどのような意味をもっていたのでしょうか。
- ◎ なぜ日勝は、農民であり、画家であることに葛藤したのでしょうか。
- ◆ あなたにとって、「自分らしく生きる」とは、どのようなことでしょうか。